

集英社文庫

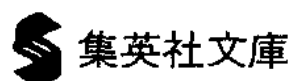
普及版

日本文学全集  
第一集

清水義範



集英社



普及版 ふきうばん にほんぶんがくぜんしゅう にほんぶんがくぜんしゅう 第一集 だいいっしゅう

1996年2月25日 第1刷

定価はカバーに表示してあります。

著者 し みづ よし のり  
清水 義 範

発行者 若 菜 正

発行所 株式 集 英 社  
会社  
東京都千代田区一ツ橋2-5-10  
〒101-50

(3230) 6100 (編集)

電話 東京 (3230) 6393 (販売)

(3230) 6080 (制作)

印刷 大日本印刷株式会社

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送りください。  
送料小社負担でお取り替えいたします。

集英社文庫

普及版

日本文学全集

第一集

清水義範



集英社版



普及版  
日本文学全集  
第一集

目次

|                 |        |     |
|-----------------|--------|-----|
| 第一回配本           | 古事記    | 5   |
| 第二回配本           | 源氏物語   | 33  |
| 第三回配本           | 方丈記    | 57  |
| 第四回配本           | 平家物語   | 81  |
| 第五回配本           | 小倉百人一首 | 107 |
| 第六回配本           | 徒然草    | 145 |
| 第七回配本           | 太平記    | 169 |
| 第八回配本           | 好色一代男  | 195 |
| 第九回配本           | 奥の細道   | 219 |
| 月報解説・泥江龍彦／痴水幼稚範 |        |     |



# 古 事 記





## 上 卷

序は省略。

天地が初めて分かれたこの世の始まりの時、天上界、高天たかまの原はらに現れた神の名はまず、天の真ん中の神つまり、天御中主神あめのみなかぬしのかみだった。次に現れたのは大いなる生産の神、すなわち高御産巢日神たかみむすひのかみ、その次が神を生産する神、神産巢日神かみむすひのかみだった。神を生産する神というのは、なんとなく強引ですごい。この三柱の神はみんな単独の神で、現実の姿を現しはしなかった。

その次に、まだ国土ができたてで、水に浮かんだ脂のようで、まるでくらげのようにプカプカ漂っている時に、葦あしの芽が勢いよく芽ぶくような感じに出現したのが、葦の芽そっくり生長力の神、つまり宇摩志阿斯訶備比古遲神うましあしかびひこじのかみだった。その次が、ずーっと天に立っている神、天之常立神あめのとこたちのかみ。この二柱ふたはしらの神も、単独の神で現実の姿はない。

以上の五柱の神は、特別限定仕様の別格天上神なんである。

そいでもって、その次に現れたのがずーっと国の中に立ってる神、くにのとこたちのかみ国之常立神。次に豊かなる原野の神、とよくもののかみ豊雲野神。この二柱の神も、単独の神で現実の姿はない。単独の神というのは、男女一對の神ではないということである。

さて次に現れたのは、泥の神であるところの、うひじにのかみ宇比地邇神と、砂の女神であるいもすひじ妹須比智邇神。なんじゃこれは。泥の神と砂の神も妙だが、ウヒジニとスヒジニってのも強烈である。しかしこれで驚くのはまだ早い。その次には、くい杙の神であるつのくいのかみ角杙神と、杙の女神であるいもいくいのかみ妹活杙神。なんでこんなところに杙の神様が出てくるのかさっぱりわからない。だが、そうなっているんだからしょうがないのである。

その次が、立派な住居の神、つまりおおとのじのかみ意富斗能地神と、立派な住居の女神、いもおおとのべのかみ妹大斗乃弁神。次に、ちゃんとできた顔形の神であるおもだるのかみ於母陀流神と、ちゃんとできた意識の女神であるいもあやかしかねのかみ妹阿夜訶志古泥神が現れた。この辺、ちゃんと全体の構想を考えた上で出てきているのであろうか。心配である。

そしてようやく、次に現れたのが、互いに誘いあう男の神と女の神、つまり、いざなぎ伊邪那岐神と、いもいざなみのかみ妹伊邪那美神であった。イザナギ、イザナミである。ようやく知っている神が出てきたのであった。

以上、国之常立神から伊邪那美神までを神世七代かみよ ななよという。そのうちの、はじめの二神は単独神だが、あとの十神は双神だから二柱の神で一代と数えるのである。

ちよつと休憩。

「古事記」のこの辺の面白さは、神が生み出され、国が生み出されていくその面白さである。聖書が創世記を持つように、日本人も、創世記を持っているのだ。いや、こういう神話はどの国のどの民族にもあって、ギリシア、イスラエル、インド、中国などにも似たような話がある。

たとえばここに、ちよつと珍しい例として、メソポタミアのアッカドの創世記を紹介してみよう。粘土板に楔形文字くさびがたで書かれていたものだというからすごいのだ。

「エヌマ・エリシュ」(天地創造物語)

上ではまだ天空が命名されず、

下では大地が名づけられなかったとき、かれら(神々)をはじめてもうけた男親、

アプスー(「淡水」)、

ムンム(「生命力」、かれらをすべて生んだ女親、

ティアマト（「塩水」）だけがいて、

かれらの水が一つに混り合った。

草地は（まだ）織りなされず、

アシのしげみは見あたらなかった。

神々はいずれも（まだ）姿をみせず、

天命も定められていなかったとき、神々がその混合水のなかで創られた。

（男）神ラハムと（女）神ラハムが姿を与えられ、

そう名づけられた。

かれらの年が進み、背丈がのびていく間に、アンシヤルとキシヤルが創られ、

かれらにまさるものとなった。

かれらは日を重ね、年を加えていった。

かれらの息子がアヌ、父祖に並ぶもの。

〈以下略〉（「筑摩世界文學大系1 古代オリエント集」による）

最初に、淡水の神と塩水の神が混じり合って、そこから神々が生み出されてくる、という発想がこの創世記の特徴だけれど、実は、「古事記」でも、このあとに出てくるの

だが海をかきまわして島を生むというところがあって、不思議に似ているのだ。

海とか、水とかいうものは、どの民族にとっても母の象徴なのかもしれないなあ。

さてそこで、天の神々は伊邪那岐命、伊邪那美命いざなみのみことに対して、「この、プカプカ漂っている国を整えてしっかりと作り固めよ」とおっしゃると、立派な天上の矛ほこを与えたのである。わかりました、てなもんで、二人の神は天の浮橋うきはしという、一体どういふものなのかよくわからないところに立って、矛を下げて下の世界をかきまわした。その時、グルグルとかきまわし、矛を引きあげるとその先からしたたる海水が積もって島ができたのだ。だからそれをグルグル島というのである。

ただし、グルグルをかきまわすことを昔は、おのこおろ、にかきまわすと言ったので、その島の名は淤能碁呂島おのころじまが正しい。そしてその島が一体どこにあるんだということは、ぜんぜんわかっていない。

ともかく二人の神はその島に降りて、大きな柱を立て、大きな御殿を建てた。新婚夫婦の新居である。

そして、夫は妻にこう質問した。

「きみの体はその、あの、つまり、どうなってるの」

妻の伊邪那美命はこう答えた。

「私の体は、できあがつて、でききらないところが一か所あります」

訳すとつまらない。ここは原文でいこう。

「吾が身は、成り成りて成り合ところひととこわざる処一処あり」

これに対して伊邪那岐命は言う。

「我が身は、成り成りて成り余れる処一処あり」

それだけではない。こんなことも言うのである。

「だったら、この吾が身の成り余れる処をもちて、汝が身の成り合なわざる処に刺し塞ふたぎて、

国土くにを生み成さむとおもう。生むこと奈何」

ダイレクトな言い方だこと。

今どき、これを読んで興奮する人は小学生にもいないと思うが、この言い方で男が女にプロポーズしたら強烈だろうなあ。

「ねえ、ぼくのさあ……」

やめよう。下品になる。

つまり昔だし、神様だから、その辺がおっとりしているのである。

そう言われて伊邪那美命は、「いいわねえ」と答えた。

伊邪那岐命は、

「じゃあ、ぼくときみでこの太い柱のまわりをまわって、出会って結婚しよう」と言った。  
この、結婚しようのところの原文は、美斗能麻具波比<sup>みとのまぐはひ</sup>せむ、である。美斗は、婚姻<sup>こんいん</sup>の場所のことで、麻具波比はまぐわいである。

うわーっ、知らなかった、まぐわいって「古事記」に出てくるような言葉だったのか。  
もともと、目が合う、というところからきた、男女の交接を意味する言葉なんだそうだ。  
そう下品な言葉ではないんだ。

というわけで、二人はその約束をした。

「きみは右からまわって、私は左からまわろう」

約束してまわる時、伊邪那美命が先に、

「ほんにまあ、いい男だこと」

あとで伊邪那岐命が、

「まったくいい女だなあ」

と言ったのだが、ここで男神のほうで、

「女が先にそれを言うのは、よくないんじゃないかなあ」と言った。

でもまあいいか、ということにして、寝所<sup>ちき</sup>で契<sup>ちぎ</sup>ったところ、蛭<sup>ひる</sup>のように骨なしの子が生

まれてしまった。その子は、葦で作った船に乗せて海に流した。次に淡島あわしまが生まれた。とるに足らぬ小島の意味だろう。

この二つは、二人の子のうちには入れないのである。

そして、ここで二人は相談した。

「今、私が生んだ子はよくないわ。どうしてだか天の神様にきいてきましようよ」

で、二人で天にのぼって天の神に尋ね、鹿しかの骨を焼く占いをしたところ、女が先にあらいい男ね、なんて言うのがよくない。順番が間違っているからやり直せ、という答が出た。

この話からどんな教訓を出せばいいのかはよくわからない。

とにかく二人は帰ってきて、柱をまわり、男が先に、でへへ、いい女だなあ、と言い、女があとで、おいしそうな男だわゴクン、と言って契ったところ、淡道あわじ之穂ほ之狭別島さわけのしま、つまり淡路島あわじが生まれた。今、国土を生んでいるんだからそのことを忘れないようにね。

それから、次に伊予いよ之二名島ふたなのしま、つまり四国を生んだ。この島は、身はひとつで顔が四つあって、顔に別々の名がついているのだった。すなわち、伊予いよの国は愛比売えひめといい、讃岐さぬきの国を飯依比古いひよりひこといい、阿波あわの国を大宜都比売おおげつひめといい、土佐とさの国を建依別たけよりわけというのだ。

変だなあ。

四つ名前があつて、どうして伊予之二名島なんだろう。どこにも説明がしてない。こう



いうところが古典のおそろしさである。

ただ、四つの別名の意味は大体わかっている。

愛比売えひめは、美しい姫。

飯依比古いよりひこは、飯喰めしくい男。

大宜都比売おおいつひめは、大喰い姫。

建依別たけよりわけは、健康男。

さあ、もつとどんどん生むぞー。

その前にまた休憩。

これまでのところからもわかるように、変てこりんな神様の名前や、島の名前などが「古事記」の特にこの辺には山ほど出てくるのだ。そして普通は、そういう名は訳さずにそのまま紹介することが多い。清水義範しみずよしのりを、清らかな水を飲む義にあつい手本となるような男、と説明することはあまりないわけだ。

しかし、一応そういう名前にも意味があるわけなので、ここでは、だいたいわかるように書いている。神や島が生み出される順番や、名前のつけ方のセンスがわかって面白いからである。